

に染めたこと、いろいろ思い出され、また、語っている何人もの顔も文とともに思い出されました。

…〔男性〕
海岸端の家では、この潮水汲

みが子どもたちの仕事でもあったようだ。私の家は海岸から少しばかり離れていたで、風呂の水汲みはよくやったが、潮水汲みはやったことがない。

彼は海について書いている。

うみ

ぼくはうみにいった。なみの音が大きく「ざざざ」といった。うみはほんとうにきれいだな。とぼくはおもった。

〔H・S男子〕

「先日は大変懐かしい文集をお送りくださいまして本当にありがとうございます。忘れかけていた当時のことが想い出され、懐かしさで胸がいっぱいになり『そうですね！そうだったわ!!』と独り言を言いながら一気に読みました。そして、何度も何度も読み返しています。先生方、友だち、あの頃の時代が大変いとおしく感じます。この文集を残してくださいましたT・Iさんのお母様にも心からお礼を

申しあげたい気持ちです。…皆それぞれでいいので読んでいただくでしょう。…〔女性〕

「…『いつつぼし』大変感動して読みました。あのようなのが あったことなど全然覚えておりませんでした。自分の『しくだい』を見て、私が17歳の時に亡くなった母との絆を思い涙にくれました。他の方のも笑ったり、泣いたり、この1週間からだのがきれいに なった気がします。…〔女性〕
彼女の一文を記しておく。

しくだい

わたしがきのう朝、起きてらんらくぶくろの中をみたら、しくだいがないので、かあちゃんにしくだいがいない。といって「わあん。」といつてないたら、かあちゃんが「そんならあとから学校へいってあげるでいい。」といいました。わたしは心の中で「ああよかった。」とおもいました。

〔A・M女児〕

まさに《人に歴史あり》だ。

私も大学卒業の年、親不孝の最

中に母を亡く(年齢49歳)している。

親の意見を承知で拗ねて曲が

りくねった6区の風よ積もり重ねた不幸の数をなんと詫びようかお袋に背中で泣いてる唐獅子牡丹。A・Mさんの気持ちはよく分かる。

彼女の場合は私よりもっと早かったのだ。

蒲南小の教頭をしている幼な馴染み(男性)からも電話がかかってきた。文集を現在の蒲南の子どもたちに読み聞かせ、当時の生活を解説してやっていると、う。下手な説教をするより、はるかに教育的だと喜んでいた。当時の先生たちの写真が見つかったとコピー写真を送ってくれた。

クラスの名のことも新たな発見があった。元教師(担任ではなかったが)からのがきによれば、「雪」と「月」とかいいう名前は低学年に特有なものではなく、当時は全学年が全てそうで、他のクラス数の多い学年では「竹」の次は「梅」「桃」「桜」「菊」と続いたとのことである。

「6年桜組」なんてちよつと噴き出してしまいで妙な感じだが、1組、2組というように呼ぶようになったのはいつ頃からであろうか。

学生時代以来の畏友、評論家の

呉智英氏がおもしろい解説をしてくれました。彼は私より一歳年下で、同じ愛知県内の小学校で学んだのだが、クラスの名はやはり緑とか黄であったという。当時、「進駐軍」指令による「民主化教育」の遂行ということ、1とか2とか番号をつけるのは順位と結びつくおそれがあり、好ましくないとされたからではないかというのである。真偽のほどは分からないが、案外あたっているのかもしれない。

戦後間もない当時の蒲南は、県下でも有数のマンモス学校であり、教師の数も多く、旧制中学卒業だけで正式な教員資格を持っていない「代用教員」―出征した教師の穴埋め―も少なからずおり、教師の異動は結構あったという。

新学期の開始時、校長先生が離任教師の転任先の子どもたちに話した際、「○○先生が学芸大に入られます…」と説明したことがあった。それを聞いたとき、「勉強して先生になったのにまた勉強するのか」と不思議に思ったことがあったが、やつと謎が解けた。

半世紀前からの贈り物の掲載は、今号で終わりです。

長い間、「愛読ありがとうござい
ました。」